

国文学研究資料館報

第31号

昭和63年 9月

日本社会と笑い

—共同研究「江戸の笑い」のこと—

羽鳥徹哉

二十年ほど前、ハーバード大学

教授のヒベツト先生が、研修で一

年間東京に滞在なさったことがあ

った。先生のもともとの専攻は江

戸文学だが、その時は近代文学研

究を目標になさっていた。手伝い

の学生がほしいということで、私

も指導教授三好行雄先生の紹介で

ヒベツト先生にお目にかかり、川

端のことなど二三御相談を受け

た。近代文学は真面目ですなとお

っしゃっていて、だから日本文学

とユーモアについては、いずれま

とめてみたい希望はその頃から持

っていられたようだった。しかし、

その後教授の努力は川端の「美し

さと哀しみと」の英訳（一九七五

年、クノッフ社）、「Contemporary

Japanese Literature—An Anthol-

ogy of Fiction, Film, and Other

Writing Since 1945”（一九七七

年、クノッフ社）の編纂というよ

うに、しばらく近代文学の方に向

けられていた。けれども教授の目

標は再び江戸文学に立ち戻ったと

いうべきか、あるいは日本文学全

体に標的を定められたというべき

か、昭和五十九年（一九八四）秋、

国文学研究資料館の客員教授とし

て六カ月間日本にいらっしやった

時、研究目標は「江戸文学と笑い」

であるとお聞きした。

わず六カ月の滞在、遊んでお

帰りになっていただけでもよさそ

うなものだが、なにし「真面目」

な日本のお役所のことだからそう

はいかない。資料館の客員教授は

何か共同研究を組織することを義

日本社会と笑い……………羽鳥徹哉……………1

一次 文献紹介①「花月文庫」……………3

文献資料部事業報告……………長谷川強……………4

研究情報部事業報告……………棚町知彌……………5

整理閲覧部事業報告……………本田康雄……………7

兼 報……………8

評議員・委員等名簿……………10

第十二回国際日本文学研究集会……………12

利用者へのお知らせ……………13

昭和六十三年度秋季学会開催一覧……………14

務づけられているらしく、教授の目標に合せて、「江戸文学と笑い」なる共同研究の場が設定されることになった。江戸文学の人達が何人か集められたが、前後があっても悪くないだろうということ、中世からお一人、近代では私が御指名を受けた。

昭和五十九年というと、日本でも随分笑いが注目を集めていた時である。漫才ブームのピークは昭和五十六年だったが、その名残がないわけではなかったし、井上ひさしさん、好子さんの小松座が全盛時代だった。小林信彦「ちはやふる奥の細道」が話題になり、山口昌男氏の文化人類学からの笑いへの接近も注目されていた。しかしそうした表の賑やかさも、どこまで世の内奥にまで浸透していたかという問題がないわけではない。

共同研究の研究員として集められた人達も、私の場合はひとまず

おくとして、皆さんそれぞれその道の碩学でいらっしやったが、さて突然集められ、「笑い」といった多量なりとも日本文化、文学全体のパースペクティブの中で考えざるを得ないようなテーマを与えられ、ただちに対応しろと言われても、ちよつと戸惑わざるを得なかつたかもしれない。研究会は昭和五十九年の九月から十二月まで、毎月一回、一回に二三人の人が発表し討論するという形式をとり、従つてその時の物を即座に原稿にすれば、昭和六十年三月には本が出るはずだった。それが延々延びて、昭和六十三年九月、ようやく出版社に原稿が入る運びになったという。足掛け四年という歳月は、個々の研究員がテーマに合わせて自己の分野を深めるために最低限必要な時間だったのかもしれない。

その間昭和六十一年五月から六十二年二月にかけて織田正吉氏の

『日本のユーモア』一―三(筑摩書房)も刊行され、いささか先を越された感じもなくはなかった。しかし今回の共同研究のまとめは、海外に日本の笑いを紹介するという立場から日本の笑いのあれこれの側面を分析したヒベツト教授の論文に始まり、個々の研究員はそれぞれ専攻分野の蓄積を生かしながら共通の研究テーマに深く分け入っていて、本書が日本文学日本文化研究に大きく貢献するものであることについては論を待たない。

ところで国文学研究資料館長の小山弘志先生だが、先生は御専攻は狂言で、いわば笑いの文学の専門家である。今回の共同研究には加わっておられなかったが、一度講演をお聞きしたことがある。なんでも中世の頃の狂言は、現在我々が見ているものよりよほど速いテンポで演じられていたという御趣旨のお話しだった。狂言はあまり優雅に悠長に演じられると笑いも間延びしがちだが、本来はもつと遠慮なく、きゅきゅと笑えるものだったらしい。それがどうして現在のようなものに変化してきたか、そのあたり先生は言葉を

濁されていたが、やはり江戸の政治体制が大きな関わりを持つらしい。織田正吉さんが結論的におっしゃっているが、我国の文学は物語でも詩歌でも最初は明るく笑えるものに出発しながら、やがて笑いを洗い落ししかつめらしくまるまることをもって完成し、あるいは完成と見なすような習慣がある。笑いの払い落される時期は一つの社会体制が完成し固定する時期に重なり、江戸期はその典型的な一つだったが、ただそういう時期は社会のすべての場面から笑いがなくなるわけではない。我国の特徴は、社会が固定化した場合、体制的、権威的、支配志向的場面ないし精神に於ては笑いは排除され、非体制的、民主的、庶民志向的場面ないし精神に於ては笑いは栄えるというように、笑いは一方の側に追いやられる傾向が強い。狂言も伝統芸能として庶民の日常から離れたすと、自然優雅といった方向へ身を寄せる結果にもなったのだろう。

昭和六十一年五月、イギリスのチャールズ皇子が来日し、皇子のユーモアが大評判になったことがあった。イギリスは王室でもユー

モアのセンスを持ち、アメリカではおおよそしかつめらしく勿体ぶつただけの男が大統領になどなれるわけではない。なのに日本ではというような議論があちこちでなされ、これで日本の役人や教育者も多少物分かりが良くなってくれるかと期待したが、時期が過ぎれば元のもくあみ、本質的なところではどの変化があったかという点、はなはだ心許ないところもある。

そして庶民の笑いの傾向は、最近むしろヒステリックな破れかぶれの方向に進んでいる。昭和三十年代後半から四十年代初めにかけて庶民の笑いを支配していたのはクレイジー・キャッツで、これはハナ肇という親分がいるにしても、基本的にはメンバーが個々に独立した、時には無責任を標榜したりする、民主的雰囲気の笑いだった。昭和四十年代、五十年代とおよそ二十年に亘って笑いの世界を制覇したのはドリフターズである。これはボスの長さんに反抗する四人の下っ端という構造の、反抗的態度に伴う笑いが基本で、権威に歯向い、学園騒動などが盛りになる当時の社会情勢とよく連動

していた。五十年代の終り、ドリフターズに取って代わったのは、ひょうきん族の破れかぶれハチャメチャの笑いと、たけし軍団の笑いである。たけし軍団の笑いは、ちよどドリフの関係を裏返しにした、たけし將軍にいじめられる下っ端共という、被支配者側の惨めさにまつわる笑いが基本である。いい気になりすぎ、たるみの来ている日本庶民に対する辛口の笑いといった見方が出来ないではない反面、自分で自分の始末を付けれなくなった日本庶民のファシズム待望の心性が表れているのではないかと心配する人もある。

庶民がファシズムを待望し、役人、教育者の心性も基本的には変らず、おまけにお隣アメリカでは、余裕しゃくしゃくの愛敬者「007」のボンンドに代わって、「ランボー」のスタローンが英雄視されるとなれば、いよいよ世も末、破滅は目前との感もなくはないが、むろんいい材料が全然ないというわけではない。その小さな一つは、NHKテレビニュースのアナウンサー松平定知の登場である。彼の登場は六十年四月からだだが、彼に至ってようやくNHKニュースの

アナウンサーの喋りが変わって、喋りに表情が出て来た。それまでNHKニュースのアナウンサーという表情を殺した話し方をするのが普通で、これは日本のお役所政治の非人間的、権威主義的、非民主的姿勢に繋がっていた。NHKも以前から随分努力し、今も努力しているが、六十年四月は、その努力の一つの具体的な実りが見られた時点として特筆しておいていいように思われる。役人も教育者も基本的には変わらないと先ほど述べたが、間違いなく変わって来ている部分はあるのである。

変わりつつある部分が後退せず、もつと我国にゆとりが出て、笑いが一方の側に偏るようになり、笑いが改まって来るようだと望みもある。社会が二層に分かれて、一方が無表情であったり、妙に威丈高であったりする。そうしてもう一方はそれとの対抗上いよいよハチャメチャになり破れかぶれの笑いに走るなどというのは、あまり結構な状態ではない。無表情になりがち側はもつと表情を取り戻す。ハチャメチャになりがち側は出来る限り自分の責任を意識する。それぞれ自分がかけがえのない

地上の成員だというくらいな自信が持てて、国全体のあり方もつと柔軟になり、他への対応が、けじめをつけつつこわばりを払うというようであれば、日本もかなり見込みのあるものになるのだろうが、さて如何なものであろう。笑いという問題は、日本という国の性格や命運にもかかわる重大な問題であるようである。

〔江戸の笑い〕 B6判二四〇ページ、明治書院刊行予定。内容、ハワード・ヒベット「文学としての笑い」、富士昭雄「竹斎」の諧謔とその系譜、井上敏幸「艶笑譚の背景―傘の御託宣小考―」、長谷川強「作られた笑い」、岡雅彦「口合の発生」、百川敬仁「上田秋成と笑い―俳諧性をめぐって―」、鳥越文蔵「近世芸能の笑い」、粕谷宏紀「序説・狂歌における滑稽―天明狂歌時代を中心として―」、本田康雄「洒落本、滑稽本と浮世物真似―文芸と演芸の描写法―」、羽鳥徹哉「近代日本文学と笑い試論」



文庫紹介⑩

上田市立図書館

花月文庫

上田市立図書館は「花月文庫」「花春文庫」「藤廬文庫」などの特殊コレクションを擁し、全国的にも著名な公共図書館である。今回は、それら特殊文庫のうちから、「花月文庫」を紹介しておきたい。

同文庫は、地元上田出身の飯島保作氏（文久三年―昭和六年）の集書で、氏の没後の昭和二十八年、娘婿にあたる飯島孝夫氏により上田市立図書館に寄贈されたものである。保作氏は地元の名家和泉屋七郎兵衛の子。飯島家の養子に入り、成人して銀行業に就いた。晩年は第十九銀行頭取や会社社長などの重職を務め、財界人として知られた人物である。資料収集の方は、もっぱら本務のかたわらに行なわれ、主に江戸時代の庶民文化資料や郷土資料などをその対象としていた。また川柳・狂歌を嗜み、古川柳研究家としても活躍している。文庫名「花月」はその号。

現文庫は明治以降の作品も含めて約一万冊を収蔵し、その全容は

『花月文庫分類目録』（増補改訂版昭和四十四年刊）に詳しい。蔵書はこの目録にしたがって三十七項目に分類整理されており、なかでも庶民教育（往来物）・音楽（浄瑠璃）・百人一首・随筆・俳句（俳諧）・川柳・狂歌・小説・郷土資料などが充実している。長禄本¹和漢朗詠集、丹緑本²くまのほんち、貞徳文集、本朝桜陰比事、戸田茂睡自筆稿本、御当代記、柳梅（八十五冊）などは広く知られた資料である。

国文学研究資料館では、同図書館及び調査員各位のご協力のもと、昭和四十八年度から調査に、昭和五十年から収集にそれぞれ着手している。途中数年の中断があったものの、現在は調査・収集ともに順調に進行している。なお早期に収集した分の資料約四九〇点については、一九八一年度版『マイクロ資料目録』に掲載されており、当館内でも閲覧利用が可能である。

〒386 上田市材木町一―二―四七
電話 〇二六八二―二〇八八〇

（文献資料部 竹下義人）

文献資料部事業報告

長谷川 強

本年度第一回の収集計画委員会を五月十九日、二十六日に調査員会議（総会）を開催、夏休みには集中的に調査・収集を要するものが複数あり、多忙であった。

昭和六十二年国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年三月末までに右の七九箇所（予備調査Ⅱ*印を含む）の所蔵資料計七八二七点を調査した。なお、予備調査として*印を付したものの以外にも、展示を見ての報告など、当館としてのいわば正式な調査の手續きによらないものもあるが、それぞれ情報として有益なので記録保存することとし、ここにも掲げておく。

北海道東北地区（順不同、敬称略、一部略称、以下同じ）

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・秋田県立秋田図書館・仙岳院*・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・福島県某家・相馬市教育文化センター*・三猿文庫

*

関東地区

彰考館・茨城県立歴史館・矢口丹波記念文庫・埼玉県立図書館・抱谷文庫・東洋文庫・東京芸術大学附属図書館・東京芸術大学附属図書館（脇本文庫）・福田秀一・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・東京都立中央図書館（加賀文庫）・東京誌料）・大倉精神文化研究所・内閣文庫*・慶応義塾大学三田情報センター*

中部地区

新潟大学附属図書館・上越市立高田図書館（榎原本）・弥彦神社・高岡市立中央図書館・金沢大学附属図書館・石川県立図書館（李花亭文庫）・上田市立図書館（花月文庫・花春文庫）・信州大学教育学部・諏訪市立図書館・蓬左文庫（尾崎コレクシオン）・名古屋大学図書館（神宮皇学館文庫）・鶴舞中央図書館・愛知県立大学図書館（古俳書（一）（二））・大須文庫（真福寺）・神宮文庫

近畿地区

西教寺・水口町立図書館・園部町

教育委員会（小出文庫）・立命館大学附属図書館・陽明文庫・平安博物館*・住吉大社（神社本）・大阪女子大学附属図書館・浄照坊・温泉寺・大和文華館・大方保

中国四国地区

萩市立図書館・西門寺・広島市立中央図書館（浅野文庫）*・三原市立図書館・益田家*・三隅公民館*・鳥取大学附属図書館・善通寺*・松本真一・大洲市立図書館・四国女子大学附属図書館（凌霄文庫）・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

多久市教育委員会（多久市郷土資料館）・佐賀某家・祐徳稲荷神社・島原図書館（松平文庫）・長崎某家・臼杵市立臼杵図書館・佐伯市教育委員会（佐伯文庫）*

海外

イェール大学バイネッキ図書館・シアトル市立美術館・プリンストン大学東アジア・シヤイデ図書館・コロンビア大学

二、収集

本年三月末までに左の四四箇所
の所蔵資料計六八四五点を収集した。

北海道東北地区

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・秋田県立秋田図書館

関東地区

抱谷文庫・東洋文庫・東京芸術大学附属図書館・学習院大学国語国文学研究室・福田秀一・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・東京都立中央図書館（加賀文庫）・東京誌料）・神田外語学院・静嘉堂文庫・東京大学総合図書館・国立公文書館他

中部地区

金沢市立図書館（稼堂文庫）・加賀市立図書館（聖瀧文庫）・武生市役所・上田市立図書館（花月文庫）・新城市教育委員会（牧野文庫）・刈谷市立刈谷図書館・名古屋市蓬左文庫（尾崎コレクシオン）・鶴舞中央図書館・大須文庫（真福寺）・神宮文庫

近畿地区

舞鶴市教育委員会・立命館大学図書館・園部町教育委員会（小出文庫）・陽明文庫・大方保・廣瀬神社・大阪女子大学附属図書館・住吉大社（神社本）・壽岳章子・浄照坊・大和文華館・若林正治他

中国四国地区

多和文庫・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

熊本大学附属図書館(北岡文庫)

海外
カリフォルニア大学バークレイ校・国立中央図書館(台北市)

右の内国内の分については既製のマイクロフィッシュの購入を当てたものを含んでいる。

昭和六十三年度文献資料調査・収集計画(国内)

本年度は調査八四箇所七六〇一点、収集四五箇所五八五八点の計画を立てて出発したが、前記のように集中的に調査・収集を行なう事になったりして若干の計画修正を必要としよう。調査員各位の御協力で進行は順調である。

海外資料の調査・収集

一、昨年度に続き科学研究費補助金(海外学術研究)の交付を受けて、イェール大学・議会図書館等の資料調査を行なった。新藤・吉海に館外よりいわき明星大の田嶋一夫教授、帝塚山短大の鶴崎裕雄教授の御参加を得て、八月二十一日出発、九月三日に無事帰国した。当初予定以上の資料があり、明年度も引続いて調査の予定である。
一、収集は、カリフォルニア大学バークレー校の版本類、昨年に続

いての台北市の国立中央図書館蔵の漢籍和刻本についての出願をすませた。ケンブリッジ大学及び右記バークレー校蔵本の既収集分の一部は既に本年春に刊行のマイクロ資料目録に収録され、頒布可能であるので関心をお持ちの向は御注意を乞う。

第四室

本年度は客員教授として都留文科大学文学部の久保木哲夫教授をお迎えし、五月の調査員会議には「古筆資料と私家集研究」なる講演をお願いし、業務・研究に御助力を願っている。併任助教授には、前期は福岡教育大学教育学部の工藤重矩助教授、後期は新潟大学人文学部の松城俊太郎助教授にお願いし、工藤助教授は既にその任をお果し下さった。

その他

地区会議は十月二十八日、九州地区は熊本市、中国四国地区は高松市で開催の予定。
昨年度調査をお許しいただいた抱谷文庫(故大久保忠国氏御蔵書)は、同家の御好意で暫く当館でお待ちし、八月より番付類などの調査と昨年度未済分の収集を行なった。本年度で一段落の予定。名古屋

屋の藤園堂伊藤健氏の藤園堂文庫の俳書について、同家の御好意で八月に調査・収集を終った。兼て懸案の尊経閣文庫の調査・収集について御許可を得ることができ、十月から調査にかかる予定である。次々と御理解・御好意によって貴重な資料を御提供いただけるのはまことに有難く、厚く御礼申し上げます次第である。

部内の異動は、長年当部発展に尽力された福田秀一教授が国際基督教大学に移られ、当館名誉教授となられた。御労苦に感謝し今後

研究情報部事業報告

棚町知彌

本稿は昨昭和六十二年度の報告であるが、いますでに十月であるので、前書きはいまの時点から。
年鑑印刷のCTIS化と並行しての論文目録データベース化への準備作業(編集室)。システム総見直し——すでに限界にきた、増築・増築の迷路よりの脱出——と並行してのマシン更改作業(情報処理室)。なんとか無事に予定を達成したが、三月末に堀助教授と戸田助手が転出、後任として四月

の一層の御発展をお祈りする。後任として東北大学の松野陽一教授に四月より当館と併任、十月一日より当館専任として勤務願うことになった。

調査研究報告第九号は出来が遅れ、九月上旬に諸方に発送した。抜刷は九月末出来予定、当部の研究活動の一端についての御理解と御批判をお願いする。

本年度も変らぬ御指導・御協力をお願いして報告の結びとした。
(文献資料部長)

に北村助手が着任したが、一人は未だ欠員のままである。転出の両氏とも出身校への里帰りによることと送り出したことである。一方情報室は、武井助教授が新任第一年度を無事こなし、国際研究集の発表申し込みが二、三倍にまで上がったことにも、この事業の定着と、つぎの段階への準備の要請がうかがえるのに、予算的にはまだ嫡出厄化されていない。
当昭和六十三年度は本報告の昨

年度よりも質量ともに大幅の仕事と取組んでいる事を申しこえる。

情報室

情報室では、館報発行、新聞情報集の収集、国際日本文学研究会の開催業務を担当しており、順調な進捗をみた。国際集会は十一月六日七日、九つの研究発表と、ロラント・シュナイター当館客員教授、パトリック・オニールロンドン大学教授の公開講演が行われた。参加者は九十九名（海外から約二十八名）で、盛会のうちに幕を閉じた。館報の発行は例年どおり年二回行ったが、事業報告を毎号掲載から隔号とし、「新収和古書抄」の欄を新設した。

編集室

『国文学年鑑』（昭和六一年版）を三月末予定通り刊行した。

二九号既報のように六一年版は、六〇年版からCTS（コンピュータタイプセティング）化した雑誌紀要論文目録のほか、新聞所載論文目録、単行本目録、および計報もCTS化し、年鑑印刷に使用したマスターテープを入手してデータを蓄積することとした。

また収載雑誌紀要一覽、単行本發行所一覽、単行本書名一覽、翻刻

複製一覽、執筆者索引を、新に原稿を起すことなく、コンピュータ支援のもとに目録からデータを抽出して作成した。ただこれは最初の試みであつたので、配列のためヨミを付すカナ付けテーブルが不十分だったため、予期した程省力化されなかった。しかし、次回カナ付けテーブルが整備されれば、かなりの省力化になると期待される。

『国文学年鑑』（昭和六二年版）

は現在編集作業を終り印刷にかかっている段階である。六二年版用原稿は、最初からデータベースとしての蓄積を考慮し、論文が主題としている作品名、作家名を検索キーとして付加してデータシートを作成した。また研究文献目録委員会の御意見を伺ってこの際分類も若干変更することとした。すなわち、従来「雑」に分類されていた書評・紹介を各時代の最後に、また目録等は国文学一般の最後に置き「雑」の大分類を廃止した。また近代は一般と作家別に分け、作家ごとに作家名の五十音順に配列した。国語教育も指導要領に準じて変更を行った。

過去のデータのデータベース化

は六二年度に科学研究費成果公開促進費（データベース）により五七・五九年の入力・校正・マスター作成を行ったので、昭和三八年から六一年までのすべての「年鑑」（三八・五二年は「国文学研究文献目録」のデータが一応入力された。現在各年度の分類の不統一の是正などデータの統一整備をはかっている。またこのデータを既存の検索システム、ORIONに載せるプログラムを六二年度に作成し実験的検索を行っている。今年度は、さらに、日本語処理システムHAPPINESSを導入し、その支援のもとに手作業も加えて、タイトルからの用語の切り出しとカナ付けを行ない、カナでキーボードを打てばタイトル中の用語からも検索できるようにする準備を進めている。

情報処理室

電子計算機の運用・運転を除く昭和六二年度事業は、以下のよう

(1) 目録作成

定常的な業務として、

① 国文学研究資料館蔵マイクロ

資料目録（一九八七）

② 国文学研究資料館蔵和古書目

録（一九八七）

③ 国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録（一九八七）

の版下作成を行った。

(2) データ入力等

上記目録用データおよびその他のデータ、あわせて七八、五五三件のデータ入力を行った。

(3) システム開発

以下のシステム開発を行った。

① 古典籍総合目録作成システム
古典籍データベースオンライン検索システムの概要設計及び古典籍総合目録（冊子体）出力システムの開発を行った。

② 運用管理システム

当館が保持しているデータ資源を、MT上で管理する際の蓄積、保全、管理情報等を管理する為のMT管理システム及び課金管理、利用者管理システムを開発した。

③ 公開用論文検索システムのデータローダの開発を行った。

④ マイクロ資料目録及び和古書資料目録システムの運用改善

を行った。

なお、館報三〇号に報告済であるが、本年度情報処理システムの入れ替えを行った。（研究情報部長）

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

当館は昭和六十二年七月に開館業務開始十周年を迎えることができた。この間、多くの所蔵者・関係機関等の協力により所蔵資料も年々充実してきている。

この節目の年に当たり、四月からはマイクロ資料目録データベース及び和古書目録データベースのオンライン検索サービスがスタートした。

また、昭和六十年から保存用ネガフィルムの外部保管委託を実施しているが、昭和六十年年度収集分九七一リールを追加委託し、総計一四、一〇二リールとなった。例年実施している監査に際しては、監査実施要領に基づき当部からも検査員を派遣し、寄託したフィルムの保管状況等を検査した。この他、当部が担当する業務(資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等)は順調に進展した。

- (1) 資料の受入
- (-) 整理閲覧室

所蔵資料統計

(昭和63年3月末現在)

別表

資料種別	点数	冊(リール)数
マイクロ資料	マイクロフィルム*	83,828点 18,299リール
	マイクロフィッシュ	3,680点 11,143枚
	紙焼写真本	53,628点 43,314冊
図書(古書及び新刊書)	20,715点	65,814冊
逐次刊行物	3,254誌	85,301巻号冊
寄託図書	141点	178冊

*他に紙焼写真による収集がある。

昭和六十二年年度の受入資料数は、マイクロ資料(ロールフィルム七四七リール、紙焼写真本二、七〇九冊)、図書(二、九五五冊)、逐次刊行物(継続受入等約一、六八〇誌)全所蔵タイトル数三、二五四タイトル)、雑誌製本(二九七冊)であった。その結果、昭和六十二年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

- (2) マイクロ資料の整理

三〇文庫、八、五四八点を収録した『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八七年』(第十一冊)を刊行した。これによって、全体で約九四、〇〇〇点が目録として整理された。

- (3) 図書資料の整理

昭和六十二年度に受入れ、整理した和古書約一三〇点を収録した『国文学研究資料館蔵和古書目録増加四(一九八七)』を刊行した。古典作品典拠ファイルは約六万件のデータのパンチを行い、約三万四千件の著作データを作成、登録した。

定常業務では、約千五百冊の図書の整理、和古書の帙作成七〇点、補修約六〇〇丁をそれぞれ行った。

- (4) 古典籍総合目録作成事業

昭和六十二年度末に行われた古典籍総合目録委員会において、目録版下の最終形式及び昭和六十三年度末を目標とした冊子体目録の刊行計画が承認された。具体的な刊行形態については、より多くの利用者が入手できるように、民間の出版社から刊行することを含め、なお当館で検討することにな

った。

目録刊行が現実日程に上ったことを受け、収録予定の残りの書誌データ約一万件のパンチ、入力、データベースへの登録を行い、あわせて、具体的な作業スケジュールを策定した。また、作業中だった著者ファイルデータの読みの付与を完了した。

- (5) 閲覧業務

昭和六十二年度は、来館利用による入室者数が八、四一〇人(一日平均三〇人)、文献複写が二〇、四三八件(一日平均七四件)であった。これを前年度と比較すると、入室者数は四%減少したが、文献複写は七%増加した。利用登録者は累計(三月末まで)で一九、二一六人に達した。また相互利用(郵送による文献複写・貸出)の申込受付は、一、五〇二件で、前年度に比べて七%増加した。

昭和六十二年四月からは、マイクロ資料目録データベース及び和古書目録データベースのオンライン検索サービスがスタートし、閲覧係では、総合受付と来館利用受付を担当することになった(現在、総合受付は情報処理係が担当)。

また、四月末から五月上旬にか

けて、資料のくん蒸を実施し、これと並行して閲覧室と書庫の紙焼写真本の入れ換え作業を行った。

七月には開館業務開始十周年を迎えることができ、これを機にと閲覧室整備の計画を進めてきたが、十二月には、閲覧用マイクロフィルムリリーダ六台の機種更新が実現し、さらに三月末には、蔵書点検の実施と並行して、閲覧室の照明増設工事を実施することができた。

今後も、サービス向上と閲覧室の整備、改善に向けて努力していきたい。

(6) マイクロ資料の加工

東京芸術大学附属図書館他二十六文庫一〇〇リールの作業用ネガフィルムを複製した。閲覧用ポジフィルムは、熊本大学附属図書館(北岡文庫)他二十八文庫一〇二二リールを複製した。紙焼写真本の複製は二七〇冊行った。文献複写サービスのポジフィルム作製二十八件、撮影を三十三件行った。

(二) 参考室

(1) 参考業務

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書

実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

(2) 公開講演会及び展示会

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示会を開催した。

● 公開講演会

第26回(6月13日、於当館)

「雁の世界」寿岳章子(前京都府立大学教授)、「西鶴雑談」前田金五郎(専修大学教授)。

第27回(10月24日、於松江市・島根県民会館三階会議室)

「芭蕉のころ」鈴木亨(島根大学教授)、「王朝日記文学の本質」木村正中(学習院大学教授)。

● 第10回夏期公開講演会「本の話」(7月23日、25日、於当館)

23日「写本から刊本へ」中国印刷史序説」尾崎康(慶応義塾大学教授)、「日本の本」書物の装幀」伊地知鐵男。

24日「挿絵本と絵本」松平進(甲南女子大学教授)、「古筆」久曾神昇(愛知大学名誉教授)。

25日「江戸の本屋」長友千代治(愛知県立大学教授)、「図書館・文庫事情」沿革と現状」朝倉治彦。

● 第17回特別展示

「絵巻・絵本ならびに版本の挿絵」(11月2日、14日)。「国文学研究資料館特別展示目録11」を刊行)

● 常設展示

第34回「和書のさまざま」(4月13日、6月27日)。

第35回「近世小説」(7月20日、9月26日)。

第36回「中世の文学」(10月12日、24日および11月24日、12月26日)。

第37回「源氏物語」(1月18日、3月24日)。

なお、第10回夏期公開講演会の筆録集である「本の話(国文学研究資料館講演集9)」を刊行し、大学図書館等への寄贈のほか、希望者にも配布している。

(整理閲覧部長)

彙報

委員会日誌

昭和六十三年

5月17日 国際日本文学研究集会委員会(第一回)

5月19日 国文学文献資料収集計画委員会(第一回)

5月26日 国文学文献資料調査員会議(総会)

6月10日 文献目録委員会(第一回)

7月8日 共同研究委員会(第一回)

7月22日 情報処理システム運用委員会(第一回)

7月26日 文献目録委員会(第二回)

評議員会議の開催について

本年度第一回評議員会議が昭和六十三年七月六日(水)に開催され、議長に阿部秋生評議員が、議長職務代理に尾玉幸多評議員がそれぞれ就任した。議事は、国文学研究資料館名誉教授の承認、館長選考に関する申合せ等、管理運営の概況、昭和62年度事業報告、昭和64年度概算要求について評議が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第一回運営協議員会議が昭和六十三年六月十七日(金)に開催され、議事は、国文学研究資料館名誉教授の候補者について及び館

長選考に関する申合せ等について協議が行われた。

野村 喬 日までの8カ月間

人事異動

(昭和63年3月)昭和63年8月

(採用)昭和63年4月1日付

文部教官(研究情報部助手)

北村啓子

文部教官(史料館助手)渡邊尚志

(昇任)昭和63年4月1日付

文部教官(史料館教授)原島陽一

(同助教授から)

文部教官(史料館助教授)大藤 修

(同助手から)

(転入)昭和63年4月1日付

文部事務官(管理部長)大嶋 浩

(文部省から)

(転出)昭和63年4月1日付

文部教官(研究情報部助教授)

堀 浩一(東京大学へ)

文部教官(研究情報部助手)

戸田誠之助(電気通信大学へ)

文部事務官(管理部長)桜井金也

(宮城教育大学へ)

(辞職)昭和63年3月31日付

文部教官(文献資料部教授)

福田秀一(国際基督教大学へ)

文部教官(史料館教授)

藤村潤一郎(創価大学へ)

(客員教授)昭和63年4月1日

昭和64年3月31日

文献資料部

久保木哲夫(都留文科

外国人研究員

カレン・ブラゼル

アメリカ合衆国 コーネル大学

教授

研究題目 能の研究

期間 昭和63年11月1日(昭和

64年3月31日)

公立大学研修員

松本 四郎

現 職 都留文科大学文学部

教授

研究題目 日本近世史料の調

査・研究

期 間 昭和63年4月1日(

昭和64年3月31日)

私学研修員

浅野 三平

現 職 日本女子大学文学部

教授

研究題目 日本近世文学の資料

調査

期 間 昭和63年4月1日(

昭和63年5月31日ま

で(昭和63年10月1

日(昭和64年3月31

日までの8カ月間

野村 喬 青山学院女子短期大

現 職 学国文学科教授

研究題目 日本芸能史の研究

期 間 昭和63年4月1日(

昭和64年3月31日)

揖斐 高

現 職 成蹊大学文学部教授

研究題目 日本近世文文学の

研究

期 間 昭和63年4月1日(

昭和64年3月31日)

外国出張

安澤秀一

安藤正人

渡航先

連合王国 フランス

目的 第11回国際文書館会議

等に出席

期 間 昭和63年8月15日(昭

和63年8月31日)

新藤協三

吉海直人

渡航先

アメリカ合衆国

目的 在米日本文学資料の所

在に関する調査

期 間 昭和63年8月21日(昭

和63年9月3日)

(併任)昭和63年4月1日

昭和63年9月30日

文部教官(文献資料部教授)

松野陽一(東北大学教授)

文部教官(文献資料部助教授)

工藤重矩(福岡教育大学助教授)

昭和63年4月1日

昭和64年3月31日

文部教官(研究情報部助教授)

堀 浩一(東京大学助教授)

昭和63年10月1日

昭和64年3月31日

文部教官(文献資料部助教授)

松越俊太郎(新潟大学助教授)

館報入手(希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館評議員

任期 昭和63年7月1日、昭和65年6月30日

- 阿部秋生 東京大学名誉教授、実践女子大学名誉教授
- 秋山 慶 東京女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
- 猪瀬 博 学術情報センター所長、東京大学名誉教授
- 今井源衛 梅光女学院大学文学部教授、九州大学名誉教授
- 上山春平 京都国立博物館長、京都大学名誉教授
- 小田切進 立教大学文学部教授、日本近代文学館理事長
- 加藤純一 東京都立中央図書館長
- 京極純一 東京女子大学長、東京大学名誉教授
- 児玉幸多 学院大学名誉教授
- 齋藤 正 国立劇場会長
- 阪倉篤義 甲南女子大学文学部教授、京都大学名誉教授
- 田中 裕 梅花女子大学文学部教授、大阪大学名誉教授
- 土田直鎮 国立歴史民俗博物館長、東京大学名誉教授
- 坪井清足 大阪文化財センター理事長
- 中井信彦 慶應義塾大学名誉教授
- 橋本不美男 早稲田大学文学部教授
- 林 大 国立国語研究所名誉所員
- 秀村選三 久留米大学比較文化研究所教授、九州大学名誉教授
- 松田智雄 東京大学名誉教授
- 宮川 満 大阪教育大学名誉教授
- 有吉 保 日本大学文学部教授
- 伊藤正義 大阪市立大学文学部教授
- 石井 進 東京大学文学部教授
- 稲賀敬二 広島大学文学部長、同文学部教授
- 久保田 淳 東京大学文学部教授
- 小林清治 福岡大学教育学部教授
- 佐竹昭廣 成城大学文学部教授、京都大学名誉教授
- 尾藤正英 川村学園女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
- 平澤五郎 慶應義塾大学附属研究所道文庫長、同教授
- 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
- 棚町知彌 国文学研究資料館研究情報部教授
- 長谷川 強 国文学研究資料館史料科館長
- 原島陽一 国文学研究資料館史料科館長
- 本岡康雄 国文学研究資料館整理閲覧部教授
- 松野陽一 国文学研究資料館文庫部教授

国文学研究資料館運営協議員

任期 昭和63年8月1日、昭和65年7月31日

- 森 安彦 国文学研究資料館史料科館長
- 安澤秀一 国文学研究資料館史料科館長
- 安永尚志 国文学研究資料館研究情報部教授
- 山中光一 国文学研究資料館研究情報部教授
- 渡邊守邦 国文学研究資料館文庫部教授
- 朝倉治彦 四日市大学附屬図書館長、同大学教授
- 新井栄蔵 奈良女子大学附屬図書館長、同文学部教授
- 神作光一 奈良大学長、同文学部教授
- 春田 宣 国學院大学長、同文学部教授
- 平澤五郎 慶應義塾大学附屬研究所道文庫長、同教授
- 本田義憲 京都外国語大学外国語学部教授
- 松平 憲 甲南女子大学文学部教授
- 百瀬今朝雄 立正大学文学部教授、東京大学名誉教授
- 森川 昭 東京大学文学部教授
- 米倉利昭 佐賀大学教育学部教授
- 池内輝雄 大妻女子大学短期大学部教授
- 揖斐 高 成蹊大学文学部教授
- 遠藤 宏 成蹊大学文学部教授
- 久保田 淳 立教大学文学部教授
- 小島孝之 東京学芸大学教育学部教授
- 小町谷昭彦 横浜国立大学教育学部助教授
- 滝藤満義 新潟大学教育学部教授
- 野中榮一 東京女子大学文学部助教授
- 田山嘉正 山口女子大学文学部教授
- 浜野卓也 明治大学文学部教授
- 原 道生 青山学院大学文学部助教授
- 安田尚道 青山学院大学文学部助教授
- 石田晴久 東京大学大型計算機センター教授
- 稲岡耕二 東京大学教育学部教授
- 井上 如 学術情報センター教授
- 大橋琢也 国立国会図書館総務部情報処理課長
- 杉田繁治 国立民族学博物館第五研究部助教授
- 土田 衛 大阪女子大学文学部教授
- 照井武彦 国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
- 西村恕彦 東京農工大学工学部教授
- 濱田啓介 京都大学教養部教授
- 堀野 聰 京都大学大型計算機センター教授
- 壺田秀夫 青山学院大学文学部教授
- 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
- 村上 學 名古屋工業大学工学部教授

国文学資料収集計画委員会委員

任期 昭和63年4月1日、昭和64年3月31日

国文学資料調査員

任期 昭和63年4月1日、昭和64年3月31日

- 〔北海道・東北〕
- 白田昭吾 弘前大学文学部教授
- 金沢規雄 宮城教育大学附屬図書館長、同教育学部教授
- 今野厚子 高槻女子学院短期大学助教授
- 高橋伸幸 いわき明星大学文学部教授
- 田嶋一夫 山形大学教育学部助教授
- 寺島恒世 弘前大学文学部助教授
- 豊島秀範 岩手大学教育学部助教授
- 永田信也 函館工業高等専門学校講師
- 水田信也 秋田大学教育学部助教授
- 錦 仁 国学院女子短期大学講師(非)
- 〔関東〕
- 石川 泰水 群馬県立女子大学文学部講師
- 石川 了 大妻女子大学文学部助教授
- 伊藤一男 東京学芸大学教育学部助手
- 岩崎雅彦 東京成徳短期大学講師
- 川島末雄 早稲田大学文学部教授
- 雲英緒江 共立女子大学文学部助教授
- 近藤瑞男 青山学院大学文学部助教授
- 篠原 進 千葉大学文学部助教授
- 多嶋 一臣 横浜国立大学教育学部講師
- 中嶋 隆 東京大学教養学部教授
- 延廣真治 関東学院女子短期大学講師(非)
- 花井滋春 東横学園女子短期大学助教授
- 林 望 国学院大学講師(非)
- 宮本正美 国学院大学短期大学教授
- 古本瑞夫 立教大学文学部助教授
- 渡辺憲司 立教大学文学部助教授
- 〔中部〕
- 荒木 浩 愛知県立女子短期大学講師
- 稲垣泰一 金城学院大学文学部教授
- 稲田篤信 富山大学教養部助教授

- 梅原 恭則 信州大学教育学部助教授
- 岡本 重彦 愛知教育大学教育学部教授
- 神山 重彦 愛知学院大学文学部助教授
- 木越 耕 金沢大学教養部助教授
- 塩村 耕 信山学院大学短期大学部講師
- 塩原 泰雄 皇學館大学文学部助教授
- 鈴木 孝庸 新潟大学教養部助教授
- 滝澤 貞夫 信州大学教育学部教授
- 田中 喜美春 名古屋大学教養部教授
- 長友 千代治 名古屋大学文学部助教授
- 服部 直子 愛知女子短期大学講師(非)
- 服部 仁 同朋大学文学部助教授
- 早川 由美 愛知教育大学講師(非)
- 深津 睦夫 皇學館大学文学部講師
- 母利 司朗 岐阜大学教育学部助教授
- 安田 文吉 南山大学文学部助教授
- 柳澤 良一 金沢女子大学文学部助教授
- 矢野 實一 愛知県立女子短期大学教授
- 山口 博 富山大学文学部教授

(近畿)

- 赤瀬 知子 大谷大学短期大学部助手
- 阿部 泰郎 大阪大学文学部助手
- 池田 正志 甲南高等学校教諭
- 片山 剛 園田学院女子大学講師(非)
- 神尾 暢子 大阪教育大学教育学部教授
- 菊川 丞 関西外国語大学外国語学部助教授
- 佐伯 真一 帝塚山学院大学文学部助教授
- 高橋 喜一 梅花女子大学文学部教授
- 高橋 直紀 羽衣学園短期大学助教授
- 堀口 康生 大阪女子大学文学部助教授
- 源 義春 神戸女子大学講師(非)
- 山本 登朗 光華女子大学文学部助教授

(中国・四国)

- 浅野 日出男 山陽女子短期大学助教授
- 井出 幸男 高知大学教育学部助教授
- 清水 史 愛媛大学法文学部助教授
- 高橋 圭一 尾道短期大学講師
- 中村 康夫 鳥取大学医療技術短期大学部助教授
- 松原 秀明 金刀比羅宮図書館嘱託
- 余田 充 四国女子大学短期大学部助教授
- 井上 敏幸 福岡女子大学文学部教授
- 工藤 重矩 福岡教育大学教育学部助教授

(九州)

- 久保田 啓一 有明工業高等専門学校講師
- 田中 道雄 佐賀大学教養部教授
- 中本 環 熊本大学教育学部教授

国文学文献資料特別調査員

- 森 正人 熊本大学文学部助教授
- 白井 宏 四国女子大学文学部助教授
- 森田 蘭 四国女子大学文学部助教授
- 富久 和代 四国女子大学文学部助教授
- 富田 尚 愛知淑徳短期大学助教授
- 廣尾 純 愛知淑徳短期大学助教授
- 諏訪 春雄 信光女学院大学短期大学部教授
- 鳥越 文蔵 早稲田大学文学部教授
- 黒田 彰 信光女学院大学文学部教授
- 廣田 哲通 愛知県立大学文学部助教授
- 小川 健二 大阪女子大学文学部助教授
- 廣田 唯二 大谷女子大学文学部講師
- 鈴木 重三 白百合女子大学文学部助教授
- 船城 俊太郎 新潟大学文学部助教授
- 木村 八重子 東京都立中央図書館主査
- 名和 修 陽明文庫主事
- 下垣内 和人 広島文教女子大学短期大学部教授
- 播本 真一 武蔵高等学校教諭
- 石川 一 広島女子大学文学部助教授
- 佐藤 恒雄 香川大学教育学部助教授
- 田村 憲治 愛媛大学法文学部助教授
- 松井 健児 昭和学院短期大学講師
- 武井 和人 埼玉大学教養部助教授
- 大取 一馬 龍谷大学文学部助教授
- 沢井 耐三 愛知大学文学部教授
- 岡田 喜久男 梅光女学院大学短期大学部教授
- 大谷 俊太 南山大学文学部講師

国際日本文学研究会委員会委員

- 任期 昭和63年4月1日、昭和64年3月31日
- アラン・シャニエ 清泉女子大学文学部教授
- 池田 重 青山学院大学文学部教授
- 芳賀 徹 東京大学教養学部教授
- 長谷川 泉 國學院大学講師(非)
- 福田 秀一 国際基督教大学教養学部教授

共同研究委員会委員

- 任期 昭和63年4月1日、昭和64年3月31日
- 稲賀 敬二 広島大学文学部長、同文学部教授
- 大曾 根章介 中央大学文学部教授
- 島津 忠夫 大阪大学教養部教授
- 曾倉 岑 青山学院大学文学部教授
- 中野 三敏 九州大学文学部教授
- 松崎 仁 梅光女学院大学文学部教授

古典籍総合目録委員会委員

- 任期 昭和62年4月1日、昭和64年3月31日
- 菊地 勇次郎 大正大学文学部教授
- 坂下 精一 国立国会図書館図書部古典編課長
- 柴田 光彦 跡見学園女子大学文学部教授
- 田中 久文 学術情報センター事業部長
- 堤 精二 お茶の水女子大学教育学部教授
- 森川 彰 梅花女子大学文学部教授

共同研究員

- 任期 昭和63年4月1日、昭和64年3月31日
- 菊地 仁 山形大学文学部助教授
- 小林 健二 大谷女子大学文学部講師
- 島原 泰雄 皇學館大学文学部助教授
- 豊島 秀範 弘前学院大学文学部助教授
- 錦 仁 秋田大学教育学部助教授
- 中山 右尚 鹿児島大学教育学部教授
- 井上 敏幸 福岡女子大学文学部助教授
- 若木 太一 長崎大学教養部教授
- 渡邊 秀夫 信州大学文学部助教授
- 佐藤 道生 宇都宮大学教養部講師(非)
- 平 雅行 関西大学文学部助教授
- 山本 真吾 広島大学文学部助手



第12回 国際日本文学研究集会

12th International Conference on Japanese Literature in Japan

とき：昭和63年11月11日（金）～12日（土） ところ：国文学研究資料館

11月11日（金）

あいさつ（13：20～）

研究発表（13：30～17：10）

- ①中国古典美学と日本民族自然美観の形成
 ②明石一族にみられる血の誇り
 ——明石尼君を中心に——
 ③「舞姫」のポリフォニー
 ——森鷗外、処女作の自己洞察——
 ④鷗外文学における眼差し
 ⑤幕末の文学と来日外国人たちの出会い
 ⑥現代日本幻想文学のユートピアと反ユートピアの概念
 ——安定へのなつかしさ——

小山 弘 志(国文学研究資料館長)

楊 永 良(東京都立大学大学院)
金 順 姫(慶熙大学校外国語大学)

林 正 子(岐阜大学)

谷 学 謙(東北師範大学)

望 月 洋 子(作家)

Susan NAPIER(テキサス大学)

11月12日（土）

研究発表（10：30～12：15）

- ⑦芭蕉の季節感考察
 ——時雨と五月雨を中心に——
 ⑧歌舞伎中の「いき」
 ——上方と江戸に於ける助六劇の違い——
 ⑨黒木・青本と浄瑠璃絵戻し本
 ——黒本「こく性や合戦」をめぐって——

倉 玉 姫(お茶の水女子大学大学院)

Emi SCHINZINGER(早稲田大学大学院)

高 橋 則 子(東京都立深川商業高等学校)

公開講演（13：20～15：50） 一聴講無料—

阿 修 羅 の 変 容

——須弥山の海から日本の舞台まで——

Karen BRAZELI(コネル大学教授)

(国文学研究資料館客員教授)

風 流 と 見 立 て

郡 司 正 勝(早稲田大学名誉教授)

用 語 日 本 語

参 加 費 3,000円

申 込 方 法 はがきに①氏名(ふりがな) ②住所 ③現職(所属) ④専攻 を記してお申し込みください。

参加申込締切 昭和63年10月31日(月) 当日の参加も可能です。

連 絡 先 国文学研究資料館 研究情報部 情報室

〒142 東京都品川区豊町1-16-10 電話03(785)7131 内線 402・403

第39回常設展示 11月12日(土)まで(日曜・祝日を除く)於：展示室

名 所 と 文 学

◆海外奈良絵本マイクログ
イルムのサービスにつ
いてこのたび市古貞次教授(前
国文学研究資料館長)から左
記の海外奈良絵本のマイクロ
フィルムの寄贈があった。閲
覧室の同フィルム目録(冊子
体)参照)ニューヨークパブリックラ
イブラリーのスペインサーコレ
クシオン(「屋島尼公物語」
以下計一五点)フリーアートギャラリー
(「鶴の草子」一点)フォックアートミュージア
ム(「鼠の草子」以下計八点)デンヴァーアートミュージ
アム(「磯崎」一点)コロンビア大学(「浦島」
一点)ブリテイッシュライブラリ
ー(「花鳥風月」以下計二点)ブリテイッシュミュージア
ム(「役の行者」以下計三点)これらのフィルムについて
は閲覧と紙焼写真複写のサー
ビスを行っている。

利用者へのお知らせ

◆東京都立中央図書館のサービス区分変更について

これまで東京都立中央図書館のマイクログ資料のサービス区分は、「A」(ポジフィルム・紙焼写真・電子複写—いずれも可)でしたが、このたび東京都立中央図書館のご意向により、「B」(紙焼写真・電子複写—可)に変更になりました。従いまして、今後はポジフィルム作成の複写サービスはできなくなりました。なお、これに該当する東京都立中央図書館の資料は、「マイクログ資料目録」の第二冊、第四冊、第七冊、第九冊、第十一冊に収録されています。

◆当館の刊行物の閲覧、利用について

第27号の本欄で当館の主な刊行物の一覽と入手する際の問い合わせ先を掲げました。

今回は、これらの刊行物を資料として閲覧、利用する際に必要な資料種別、請求記号を掲げることになりました。ほとんどのものが開架資料ですが、一部閉架(書庫)

のもあります。詳しくはカウンターで係員におたずね下さい。(配列は資料種別に五十音順、カッコ内は請求記号)

(1)「図書」扱いのもの
ツコ内は請求記号)

- ・国文学研究資料館共同研究報告
- 〔①初雁文庫主要書目解題、②酒田市立光丘文庫俳書解題、③連歌資料のコンピュータ処理の研究、④文学における「向う側」(①/18、②/172、③/364、④/90)〕

・国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録(1/9)

・国文学研究資料館蔵マイクログ資料目録(1/3)

・国文学研究資料館蔵和古書目録(1/10)

・国文学研究資料館創立十周年記念特別展示図録(1/12)

・国文学研究資料館特別展示図録〔蔵書印展〕(1/13)

・国文学研究資料館特別展示目録(1/11)

・国文学研究文献目録〔昭和16年(37年) (70/254)〕

・参考書誌叢刊〔①謡曲曲名索引、②索引書類リスト、③日本文学

史参考書目リスト〕(10/330)

・十年の歩み(16/30)

(2)「逐次刊行物」扱いのもの
国際日本文学研究会会誌録(7/893)

- ・国文学研究資料館紀要(7/970)
- ・国文学研究資料館講演集〔①日本の説話、②和歌の流れ、③近世の小説、④日本の歌謡、⑤日記と文学、⑥日本文学と中国文学、⑦近世の日記・記録、⑧軍記物語の展開、⑨本の話〕(7/947)
- ・国文学研究資料館報(7/980)
- ・国文学研究資料館報告(7/981)
- ・国文学研究文献目録〔昭和51年まで〕(7/987)
- ・国文学年鑑〔昭和52年から〕(7/1016)
- ・調査研究報告(7/214)

◆当館所蔵資料の翻刻掲載、写真掲載について

研究者・利用者の方から、当館の所蔵資料を、翻刻して出版物に掲載したいが、あるいは出版物に写真に掲載したいが、との申し込みや問い合わせが寄せられています。

そこで、翻刻掲載、写真掲載の申請についての手続等をご説明します。

①申請—いずれも当館所定の書式(用紙)がありますので、必要事項をご記入の上、申請して下さい。申請は、原則として本人が行って下さい。

②目的—申請は、原則として学術研究を目的とする場合のみに限られます。

③申請先・問い合わせ先—閲覧係
④料金—翻刻掲載は無料ですが、写真掲載は原則として有料となります。

⑤写真の入手方法—写真掲載の場合、写真の入手は、ご自分で撮影していただくか、複写申込をして紙焼写真を入手するか、いずれかの方法になります。前者の場合は、許可後に撮影していただくこととなります。

⑥許可書—申請後、許可の場合は、許可書を送付します。

なお、寄託資料・マイクログ資料の翻刻掲載、写真掲載の場合は、寄託者または原資料所蔵者に許可を得て下さい。

昭和六十三年秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定なしか、または大会期日未定。

解釈学会 ①千一〇千代田区神田 田神保町二一四六第2十勝ビル

教育出版センター新社内②一月三日③名古屋市教育館

近代語学会 ①千一六〇新宿区北新宿三一一〇一〇一五〇七

国語学会 ①千一〇千代田区神田 錦町三十一武蔵野書院気付

②一〇月一五、一六日③弘前文化センター・弘前大学

古事記学会 ①千一五〇渋谷区東四一一〇一八国学院大学文学

部 日本文学第二研究室

古代文学会 ①千一五七世田谷区桜ヶ丘四一五一一〇一三〇八阿

部 寛子方

上代文学会 ①千一五〇渋谷区東四一一〇一八国学院大学文学

部 日本文学第一研究室

説話文学会 ①千四五三名古屋市

中村区稲葉地町七一一同朋大学
文学部国文学科沼波研究室内②
二月三日③和洋女子大学(例会)

全国国語国文学会 ①千一〇

一千代田区猿楽町一三一桜
楓社気付②一〇月二九、三二日

③就実女子大学(岡山県)

中古文学会 ①千一五〇渋谷区東四一一〇一八国学院大学文学

部 日本文学第四(小林)研究室
内②一〇月二二日、二三、三山

形県立米沢女子短期大学

中世文学会 ①千一四一品川区大崎四一一一六立正大学文学部

国文学科第一研究室内②一〇月二九、三一、三二日③武庫川女子大学

日本演劇学会 ①千一六〇新宿区西早稲田一六一一早稲田大学

演劇博物館内

日本歌謡学会 ①千一五〇渋谷区東四一一〇一八国学院大学文学

学部 日本文学第七研究室内

日本近世文学会 ①千一〇二千代田区三番町六 二松学舎大学②

一月一九、二二日③大谷女子大学

大学

日本近代文学会 ①千一二二文京区白山五一一二八一二〇東洋大学

文学部国文学研究室内②一〇月二二、二三、三〇日③聖心女子大学

日本口承文芸学会 ①千一六〇新宿区西新宿八一四一五(財)ラ

ボ国際交流センター広報部気付

②一〇月一五日③ラボ国際交流

センタービル

日本文学協会 ①千一七〇豊島区南大塚二一七一〇②一〇月

二六日、二七日③法政大学文学部

日本文学風土学会 ①千二一四川崎市多摩区東三田二一一一専

修大学文学部国文学研究室内②

一月二六日③専修大学(神田校舎)

日本文芸研究会 ①千九八〇仙台市川内東北大学文学部内②一

月五日③東北大学文学部

俳文学会 ①千六五一一一神戸市北区鈴蘭台北町七一三一一

親和女子大学国文学研究室内②

一〇月二二、二四日③大垣市総合福祉会館

表現学会 ①千四八〇一一愛知県愛知郡長久手町長湫片平九愛

知淑徳大学内

仏教文学会 ①千六〇四京都市中

京区西ノ京壺ノ内町八一花園

大学国文学研究室内 千一七四

板橋区高島平一九一一大東文

化大学文学部日本文学科関口研

究室内(支部)

万葉学会 ①千五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

②一〇月二九、十一月一日③長

野県高遠町福祉センター講堂・

絵島ホテル

美夫君志会 ①千四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学

文学部国文学研究室内

和歌文学会 ①千一五六世田谷区桜上水三一二五一四〇日本大学

文学部国文学研究室内②一〇

月一五、一七日③日本大学文理

学部

国文学研究資料館報 第三十一号
昭和六十三年九月発行

編集・発行者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町一六一〇

郵便番号 一四二

電話(七八五)七三二一代

印刷所 株式会社 三興